

コートジボワールのライオン

私は、今、某新聞に掲載されている写真を見てとても悲しい気持ちになっています。

その写真には、がらがらに痩せ、今にも倒れそうな雌ライオンの姿が写っています。

日本でも、先日の東日本大震災のために飼い主と離ればなれになり、エサも取れずに餓死してしまった犬や牛などの家畜の姿が報道され、心を痛めている方も多いと思います。でも、写真の雌ライオンは、そんなことではないのです。ところはアフリカ西部、コートジボワールのアビジャン市にある国立動物園での一コマなのです。

コートジボワールでは、昨年11月に行われた大統領選挙を巡る混乱のため、一時内戦状態に陥りました。このため、動物園の職員が出勤できず、雄ライオンや猿、ワニなど数十匹の動物が餓死したといえます。雌ライオンはかろうじて生きていましたが、未だに食料は十分でなく、動物たちの苦難は続いているようです。

人間達の勝手な振る舞いによって、これまでも多くの動物たちが犠牲になってきましたが、雌ライオンの姿は、人間の罪の深さを改めて訴えかけているようです。

こうした悲劇は、別に外国だけの話ではありません。かつて、日本においても、第二次世界大戦中、上野動物園で飼育している動物たちを殺処分しています。

戦争が激しさを増す中、上野動物園では空襲で檻が破壊された際、猛獣の逃亡などを避けるため殺処分を決定します。まず、ライオンや熊が殺されますが、象は毒の入った餌を吐き出してしまい殺すことができません。このため、餌や水を与えるのをやめ餓死させてしまったというものです。

動物園の象たちが可哀想というのはいうまでもありませんが、何よりも先ず、そうした事態を作り出した人間達の愚かさを、私たちは直視すべきです。

コートジボワールのライオンと上野動物園の象とでは置かれている事情は違いますが、人の手によって動物園に押し込められている動物たちにとっては、五十歩百歩でしょう。

人間が作り出した戦争、テロなどによって、今でも、地球上の様々な場所で、多くの新たな犠牲が生まれています。私たちは、そんなことに、如何なる大義名分も与えてはならないと思います。 （塾頭 吉田 洋一）